憂鬱な家

小熊秀雄

青空文庫

この一篇をマルキストに捧ぐ

（一）

屋根の上の物音、禿鷹のやうに横着で、陰気な眼をした、あんまり飛び廻つて羽の擦りきれた鴉の群であつた。

こ奴等は、私の家の上で絶えず仲間同志争つた。

私はジット室の中に閉ぢこもつて、この屋根の上を駈け廻る物音を聞いた。不吉な鳥達が、黒いあしうらで跳ね廻つてゐることを知ると、私はたいへん不快な気持にとらはれた。

そして今度は戸口の物音である。

近所に住んでゐるらしい病気の犬こ奴の姿も私には気に喰はない。何時も腰を、ズルズル曳きづつて歩く、ちよつと見ては、坐つてゐるのか、立つてゐるのか判らない犬であつた、

この犬が戸口に体を一生懸命にこすりつけて、枯れ草のやうな音をたてるのであつた。

逃げてゆくその斑犬（まだらいぬ）の後姿を見ると、まるで赤ん坊のやうにすつかり毛がぬけてしまつてゐる。

頸や肢は哀れに痩てゐるが、腹だけは何つも大きく瓶のやうにふくらんでゐた。

私の郊外の家を、訪れる物音といつたら、まづこの不吉な鴉と、毛のぬけた犬位なものであつた。

海のやうに展けた雪原には何日も何日も吹雪が続いた、殊にこの吹雪のやんだ翌日の静けさは、実に惨忍に静まり返つた。

私の会社に出勤した後の、このぽつちりと雪の中に建つた私の家の中には、どんなに妻は退屈に留守をしてゐるか。

彼女は、室中に縦横に麻縄を張り廻し、凡太郎のむつきを掛け、どんどんと石炭をストーブにくべて、この黒、白、黄、の斑点のあるしめつた旗を乾かしたり、室中をぐるりぐるり子供を背負つて、どうどう廻りをしたり、また流し元でたつた二つよりない飯茶碗を湯の中でコリ〳〵コリ〳〵いはせながら何つまでも撫廻してゐることであらう。

凡太郎は部屋の真中にほうりなげられ、円を描いてくる〳〵廻りながら、手近なものを、なんでも口に頬ばる、畳の間から藁屑を摘み出して頬張つたり、乾からびた飯粒、石炭の小さい塊やら、新聞紙の切つ端や、蝋燭の屑、など片つ端から口にいれた、そして嚥み下されるものは嚥み、嚥みこめないものは吐き出てゐたが、看視人である母親は、鈍感であるので多くの場合知らなかつた。

たまに母親はこれを発見するが落付いたものであつた。

——凡太郎、なんだい、今口へ入たものは、まあ驚いた、これは炭滓ぢやないの、なんといふ判らない児だらうね、お前は、口に入れることの出来るものは、なんでも喰べられるとでも思つてるのかい。

母親は、まだ歩き出すことも出来ないやうな凡太郎に向つて、威猛高になつてかう叫ぶのであつた。

その頃から凡太郎は、しきりに赤い唇を動かして

——あ、あ、あ、あ、

と意味の通じない、小さな叫びをあげるやうになりだした。

――凡太郎は、そろそろ、ものをいひ出すのでは、ないでせうか。かういつて母親は、すつかり嬉しがつてゐるのであつた。

（二）

私も、凡太郎の『最初の言葉』といふことに、非常に重大な興味と注意とを感じた。

なにかしら凡太郎が、第一に叫びだす言葉によつて、凡太郎の運命の決まつてしまふやうな、その吉凶を占ふ父親の態度でそれを期待した。

――凡太郎の奴。突然新約全書の一章でも、ベラ〳〵〳〵しやべりだしたら、俺はどんなに吃驚するだらう。

すると凡太郎の相場は決まつてしまふ。

親不孝の凡太郎

父親が、ゲジ〳〵〳〵よりも、大嫌ひな赤い帽子を冠つて、楽隊附で神様を売歩く西洋坊主。

救世軍の士官に相場はきまるのだ。

――凡太郎。神様のお先棒にだけはなつて呉れるなよ。

すると急に私の赤ん坊時代。清浄でなければならない第一の言葉が、最初に吐きだされた片言が、なにかしら『泥棒』とか『淫売婦』とか『ごろつき』とか『掏摸』とかいつた風な、世の中でいちばん忌み嫌はれてゐる言葉からでも、始たやうにも考へられ、私はそれを凡太郎に怖れて

『花』『太陽』『蝶々』『お星さま』などと、世の中で精々美しい品々を選んで覚えこませようと努力した。

しかし凡太郎が最初に覚えこんだ言葉はなんであつたか。

それは意外にも、私の郊外の家の二つの訪問者であつたのだ。

――かあ、かあ、かあ、かあ

屋根の上の烏の鳴き声と、それから数日して

――わん、わん、わん、わん

玄関口で、皮膚を鳴らす毛の脱けた病気の犬の鳴き声であつたのだ。

私は落胆した。

――凡太郎に合図をしてゐるやうですね、嫌らしい烏。

妻は天井を仰いだ。いまにも屋根を剥いて持つてゆきさうに荒々しく屋根を渡り歩き烏どもは鳴きたてた。すると妻のいつたやうにいかにも凡太郎はその尾について

――かあ、かあ、かあ、かあ

とやり出すのである。そして不吉な烏と、病気の犬との真似をものゝ十日もつゞけたのであつた。

『唖ではないだらうか』こんな不安を抱き始た。然しそれからまもなく凡太郎は、またもや奇妙な叫びをあげはじめた。

――まふ、まふ、まふ、まふ。

最初はその意味がどうしても私達には判断が出来なかつた。

――貴方判りましたよ。凡太郎は牛の真似をしてゐるらしんです。

妻は、或る日凡太郎を抱きあげながら窓際に立つて戸外をながめてゐたが、突然かういつた。

私の家の近くに牧場があつた。そしてその牧柵が、私達の家の窓の下までも伸びてつゞいてゐた。

（三）

牛達はこれまでは、寒い気候なので、牧舎の中で飼はれてゐたが近頃になつて、晴た天気がつゞくので、牛達は雪の上に散歩にださされた。そして嬉し気に毎日

——もう、もう、もう、もう。と鳴いてゐた。

凡太郎はその牛の鳴き声を覚えこんだものらしい。

何時も片眼をつむつて考へことをしてゐる、底意地の悪さうな牛の鳴き声を凡太郎が覚えこんだことを知ると、私の理想主義が谷底に転げ落たやうな失望を感じた。

『花』『お日さま』『星』『蝶々』などといふ、麗しいものを覚えこまずに病気のごろつき犬や、不吉な鴉や尻に汚らしい糞を皿のやうに、くつゝけて済ました顔をしてゐる牛共の言葉を覚えこむとは何事だらう。

——しかし考へて見れば、無理もないことだらう。

と私は思ひ返したのであつた。

教へ込ませようとした『花』などは、冬の真中にゐて、到底子供の眼になど触れることが出来ないものであつた。

『太陽』は雪雲の中に、姿を隠してゐて、少しも顔を見せず、地を照してゐる明りは、太陽の光りではなかつた、雲の明りと雪の反射であつたし。

『蝶々』などの、ひら〳〵陽炎（かげろふ）の上を舞ふ春の季節には、まだ五ヶ月も経たなければならなかつたし。

すべてがみな憂鬱な冬の姿の中の、静物のやうに、自分自身がもつてゐる光りで、僅かに自分の周囲の小さな部分を明るくして、生きていかなければならない、惨忍な季節であつたのだ。

どうして幼い凡太郎が。

生れてから、まだ一度も春にめぐり合つたことのない凡太郎が。

『花』や『蝶々』や『星』の美しさを知る道理があるだらう。

私の家の、唯一の訪問者である犬、鴉、牛、などの言葉を真似たことが、当然であつたのだ。

——色々の真似をするところを見ると、唖でもないやうですね。

——うむ。

と私は妻に、うなづいて心の中で、

——今度は、きつと人間の言葉を覚えこむだらう。

ことを期待してゐたのであつた。

静かな日が何日も続いた。

濃霧は、私達の家のめぐりを、とり囲んだ。

この霧のたちこめた日は、私の感情をさま〳〵〳〵に変へた。

美しい夕方の薄い霧は、遠くの方を、幻のやうに見せて、なにか蜜のやうに、甘いものでもあるかのやうに、私をよろこばした。私は凡太郎を抱いて家の前に出て充分に凡太郎の小さい口に吸ひこました。

すると凡太郎は、しまいには、しきりに嚔（くさめ）をするのであつた。

怖ろしいのは夜更の濃い霧であつた、重い濡れた幕のやうに、小さな家の上に掩ひかぶさるやうな恐怖を感じた。

その重いものは、はねのけてもはねのけても、匍つて来て屋根の上に白い獣のやうな腹を載つけた。

硝子窓から、霧の戸外を覗いて見ると、一寸先も見えない。

不意に霧の中に隠れてゐる何者かゞ、私達の家にむかつて、弾丸

を撃ち込みはしないかといふ、不安に脅かされる日もあつた。

私の家を訪ねるものは、獣や鴉の他に毎土曜日の、顔の黒ん坊のやうな、煙筒掃除人と、郵便配達の声位なものであつた。

或る日、不意に二人のマルクスが私の家を訪ねて来た。

（四）

郊外になど住んでゐると、色々な物売が、女子供とみれば甘くみて、押つけがましく、恐喝らしく玄関先に品物を拡げ、買つてやらなければ何時までも立去らうとしないことが多い。

殊に私を憤怒させるものは、神仏の押売をする人達であつた。

性来神や仏といふものを嫌つてゐる私は、この神仏押売人の撃退策を、平素から妻に教へこんでゐた。

――妾（わたし）のところには神棚もお仏壇もありませんので、お札を頂戴してお粗末になつてはかへつて勿体ないと思ひますので。

私はかう台詞を妻に教へこんであるのだ。

『天照皇太神宮』や『稲荷大明神』や『イエスキリスト』などのお札売はチェツと忌ま〳〵しさうに舌打をして帰つてしまふのであつた。

二人のマルクス（私達夫婦はこの二人の青年をマルクスと呼んでゐた）

二人の青年が、私の家の玄関口を訪れたとき、妻は例の台詞でこのマルクスのお札売を追払つてしまはうとしたのであつたが、二人のマルクスは、一足飛に室の中に襲ひかゝつて来て、盛んにしやべり立たのであつた。

一人のマルクスは痩せこけてゐた。いま一人は肥えてゐた。

肥えた方のマルクスの懐が妊婦のやうにふくらんでゐた。

肥えたマルクスは、懐中からそのふくれたものを取出て

――ぢやらん、ぢやらん、ぢやらん。

それはタンバリンであつたのだ。

しきりに鈴を鳴らし始ると、いま一人は古ぼけた皮の鞄の中からポスターを取出て、私の室中にその毒々しい極彩色の絵や統計の描かれたものをべた／〃＼貼はじめた。

――なんといふ遠慮のない人達でせうね。

さすがに妻は驚いた様子であつた。

彼等が帰ると、私も議論に疲れそして彼等のいつてゐることが、いかにも真理のやうに考へられて、瞬間興奮を感じた。

しかし彼等が、霰に頭を打たれて、暗いなかに立去つてしまふと何もかも馬鹿らしくなつてしまふのであつた。すべてが冷静に、憂鬱なもとの姿に還つてしまふ。

その翌日も、その翌日も、二人のマルクスは私の家をつゞけさまに襲つた。

そして火のように熱心な態度で私を説き伏せようとしたのであつた。

鴉、犬、牛、そして二人のマルクス。

私の静寂な家を訪ねるものはこれだけであつた。

凡太郎は、いつの間にか二人のマルクスにすつかり馴れてしまひ、抱かれて笑顔をみせたり、ついにマルクスの膝の上に小便をひつかけたりした。

――我々の聖なる父、マルクスは。

彼等は賑かに聖なる父の名を呼つゞけた。

凡太郎は円い眼をして、この若い来客の、議論の口元の動くのをじつと凝視してゐた。

足を踏み鳴らし、そして又もや霰に、頭を打たれながら、二人の客は、暗い中を帰つた。

マルクス主義が、我々夫婦の実生活にどんな役割を演じようとするのか、それは我々家庭にとつて『摺鉢』や『大根おろし』よりも不用な物。愚にもつかない信仰であるのだ。

私は不意に形容の出来ない笑ひがこみあげてきた、次に滑稽な不安が頭をもたげた。

凡太郎の次の言葉。突然凡太郎が『マルクス』などゝ叫びだしたなら、私達夫婦はどんなに吃驚するであらう。といふことであつた。

その時には、私は観念し、凡太郎を蜜柑箱に入て、河に流してやるばかりだ。

青空文庫情報

底本：「新版・小熊秀雄全集第一巻」創樹社
　1990（平成2）年11月15日新版第1刷発行
底本の親本：「旭川新聞」旭川新聞社
　1927（昭和2）年3月23日～26日
初出：「旭川新聞」旭川新聞社
　1927（昭和2）年3月23日～26日
入力：八巻美恵
校正：浜野　智
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
2006年3月4日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

憂鬱な家

小熊秀雄

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/